

9月15日(金) シンポジウム第2室(732)

識として提供するだけでなく、同時にその使い方を指導し、訓練させることが重要である。今回は、文法項目のいくつかの、この線に沿った整理統合例を提案する。

## 英語学習にパースペクティブを与える英文法指導を考える

提案者 千葉 元信  
(宮城工業高等専門学校)

テキストの次の英文に学生がつまづいた。

As the time from the highest position of the sun one day to its highest position the next day always seemed the same, they called this amount of time one day.

学生がつまづきは、one day と出てくると条件反射的に「ある日」と置き換えたことにあった。主節中における one day は副詞句ではない。より基本的には one day という語句の解釈がだめだというよりも、文構造を理解していない。

また、単語の意味はわかるのですが、どのように訳していいかわかりません、という言い方をしてくる学生がいる。日本語で、話のつじつまがおかしいときに、「てにをはが合わない」と言うが、その「てにをはが合わない」と英文を前にして学生は言う。

学習段階の初期における質問の中には、最初に引用した例に見られるように、いわゆる学習文法でいう5文型のうちの「S+V+O+C」に関するものが一番多いように思われる。学習者にとっては目的格補語がむずかしい。

日本語であれば、文法関係を示すのに「…は」「…を」「…と」などの助詞を用いるが、英語はOE以来、屈折語尾を消失させているので、格関係は語の並び方で示される。すなわち、語順で決まる。たとえば、Mary killed Tom. という英文について、日本語では「メアリーがトムを殺した」とも「トムをメアリーが殺した」とも言うことができるが、英語では Mary killed Tom. と Tom killed Mary. では、動詞 kill を行為した者と、kill という行為を受けた者との間に、逆転が生じることになる。

SOV類型の日本語においては、助詞「が」「を」が主語、目的語を決定するが、SV O類型の英語においては、Vを境にして、Vの前の位置が主語領域であり、Vの後ろの位置が目的語領域と定まっている。

日本人向けの英語学習参考書や英文法テキストでは、はじめに5文型を扱いながら、なぜ文型が英語ではたいせつなのかという視点を与えてくれるものがないように思う。5文型の背後に、英語ということばの仕組みとして、語順の固定化が存在していることを意識しないかぎり、なぜ文型を覚えなければならないか学生はわからないだろう。覚えなければならない理由を納得しているのといないのでは、英語学習に大きな差が出てくると思われる。

英文法の検定教科書がなくなり、英語コミュニケーション能力が強調される時代であるから、英文法は教えなくともよいということではない。旧来のグラマー・コンシャスネスの弊害は避けなければならないが、英語の基礎的能力を養い、英語を使って表現しようという態度を育てるために、日本の学生が学校教育の限られた時間内で英語を学習する際に

9月15日(金) シンポジウム第2室(732)

は、時代がどのように変わろうとも、いぜん英文法の重要性は変わらないのではないか。英語学習にパースペクティブを与える、そのような英文法指導を考えたい。

## FULL SENTENCE の復活を！ ～ いわゆる比較構文を例として ～

提案者 戸田 征男  
(東北学院大学)

国際化・情報化が進むにつれて、英語教育の改革、とりわけ文法教育に対する改革が叫ばれている。従来の訳読中心主義、言い換えれば欧米文化の受容を主目的とした受信型から、自らの思想・文化等を伝えるべく、発信型へと転換が迫られている。教室で長年英語の授業を受けたにもかかわらず、いざ外国へ行くとさっぱり英語が使えないからだ、とも言われる。言語活動重視・コミュニケーション能力の育成、等のうたい文句が前面に押し出されている。そこでは、従来の英語教育をしっかりと受け入れ、努力を重ねて、コミュニケーション能力を開発・育成し、国際舞台で堂々と活躍してきた先人たちの姿は、ある意味では特殊才能(能力)としてしか捉えられていない。日常の挨拶・海外旅行での買物の際の会話・ある場面が与えられた時に、習った表現を繰り返し使用すること、これらのことがコミュニケーション能力ではない。文法能力・談話能力・社会言語能力・方略能力の4能力からコミュニケーション能力が成り立つとするならば、まず第一に文法能力が優先されるべきである。英文法を習得すれば、即英語によるコミュニケーションが可能、という訳ではないが、英文法を習得せずに英語でのコミュニケーションは出来るはずがない。人間は、無限の数の文を読み・聞き・話し・書きながらコミュニケーションを営むことによって、社会生活を送っているのである。授業時間の減少・教養主義の終焉・真の実用とは何か・個人の努力だけではなかなか習得できず、適切な指導者から適切な時期に適切な指導を受けるべきものは何か、等を考慮すると、コミュニケーション能力育成のために(だからこそ)、いまこそしっかりと英文法指導が不可欠である。コミュニケーション能力は話す・聞く領域に限られるべきではなく、活字を通して発信者の意図を読み取り、自己をも表現するという読む・書く領域の方が、より大きな情報量をもつ場合がおおい。知的に複雑な内容・微妙な内容・正確を期する内容・大きな思想、等は文法能力無しには受信も発信も不可能である。

コミュニケーション能力も含め、英語力のすべての基礎になるものとして、これまで以上に精選された、しかも応用力に富む英文法体系の、簡潔な記述が求められる。言語資料から帰納的にルールを発見させるのではなく、演繹的にルールを与える方が、学習者の年齢を考慮しても、効果的である。～熟語・～語法・～構文、等という表現の指導は、何が熟語か・何が語法か・何が構文か、を区別する手がかりがない。明解でない説明は、学習者に、かえって無用の負担をかけることになってしまう。たとえば、It ～ that ～ にしても、それが、いわゆる It ～ that ～ 構文であるとか、強調構文である、とか言われ